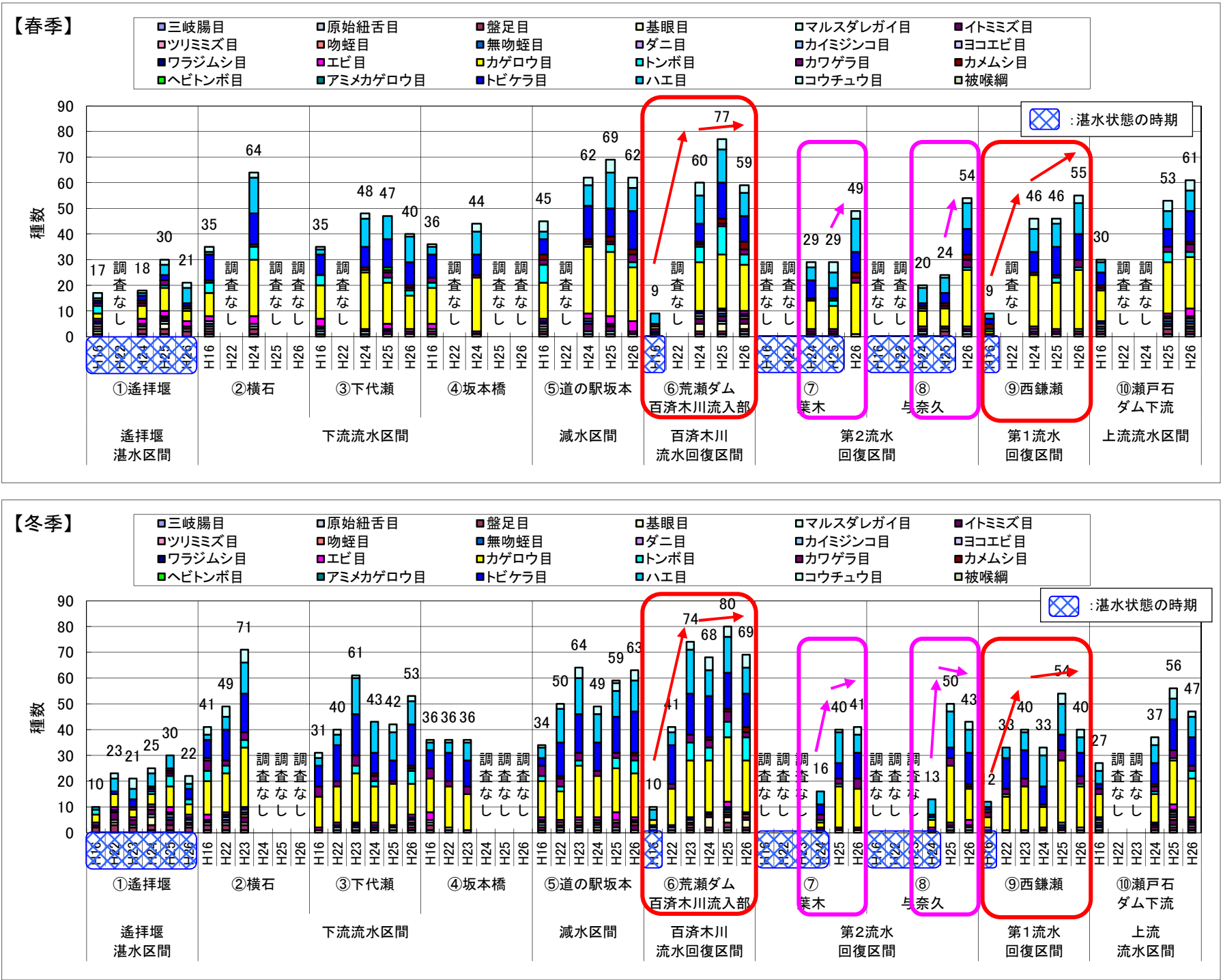


10) 底生動物

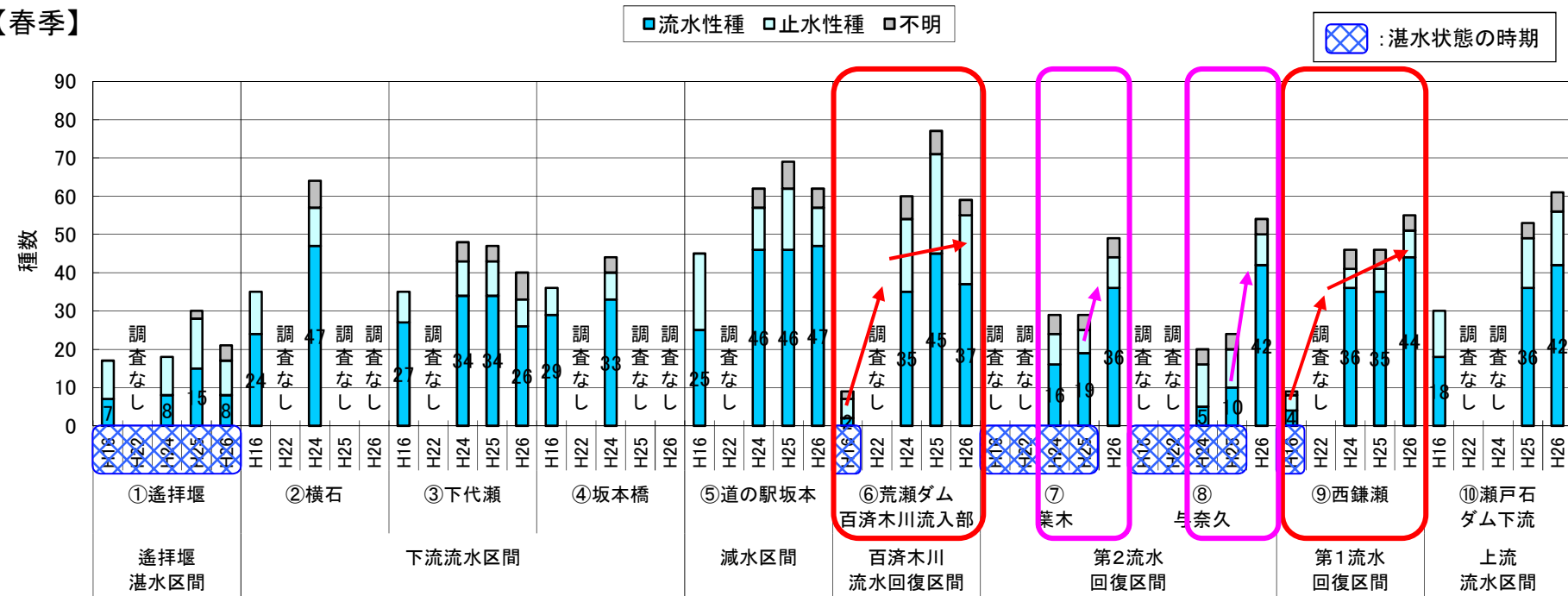
評価項目	視点	平成26年度の調査結果概要	評価概要
経年的な変化状況	全確認種数 流水性種の種数	・第1流水回復区間の「⑥百済木川流入部」や「⑨西鎌瀬」では、H22に大きく増加した後、そのレベルを平成26年度も維持している。 ・第2流水回復区間の「⑦葉木」や「⑧与奈久」は、H25の冬季に大きく増加した後、そのレベルをH26年も維持している。	・H22年4月のゲート開放によって第1流水回復区間及び百済木川が、H25年6月の水位低下装置の操作によって荒瀬ダム上流の第2流水回復区間が流水環境に変化し、瀬や淵、水際の浅瀬等の多様なハビタットが形成され、それに対応して様々な環境に適応する種も増加し全体としての種数が増加した。また、特に広く瀬が形成されたのに伴い流水性の種も増加した。

全確認種数



流水性種の種数

【春季】



【用語の解説】

・流水性種と止水性種：流水性種は、河川の瀬を主な生息場とする種。止水性種は、湖沼や水田を主な生息場とする種。荒瀬ダムの撤去によってダム上流域の水位が低下し流速が増すと、流水性種が増加し、止水性種が減少すると考えられる。代表例として、流水性種ではカゲロウ目、カワゲラ目、トビケラ目の大部分の種が、止水性種ではマキガイ綱、ミミズ綱等に含まれる種が挙げられる。

流水性の代表種



シロハラコカゲロウ

- ・日本中に多数生息するコカゲロウの代表種。
- ・石表面に張り付き、付着藻類を食べる。
- ・羽化期は3～12月であるが、ピークは冬季。



エルモンヒラタカゲロウ

- ・日本中に多数生息するヒラタカゲロウの代表種。
- ・石表面に張り付き、付着藻類を食べる。
- ・羽化期は5～11月。

【冬季】

